

坪内逍遙の〈日本〉

—— 国民国家を語るテキスト ——

一 想像される〈日本〉

近年、言文一致を物語言説の基本様式とした近代小説はナショナリズムを想像的に形成したとする見解が支持されている。結秀実『日本近代文学の〈誕生〉』（太田出版一九九五・四）は、近代文学成立期の小説が俗語革命・出版資本主義によって流通することで国民を構築すると主張した。例えば、氏は、坪内逍遙「清治湯の講釈」（『東京絵入新聞』一八八二・九・一三―一二・二六）を政党政治の啓蒙により近代的国民国家像を〈日本〉に定着させる物語として提示する。同様に、中津国彦が利子と婚約しながら約束の二三歳には結婚できない『諷誠京わらんべ』（日野商店一八八六・六）は、一八九〇（明治二三）年の国会開設以後も国民が権利を獲得できない寓意によって、ありうべき〈日本〉をイメージさせる。「衆議院の議員なる者は決して一地方の代理人で無いから最も全国に信用ある人を選んで出す事が必要」（２下）と語る「修羅のちまた小呉魏蜀誌」（『読売新聞』一八九〇・六・一―二四）は、衆議院選挙の中で「国家の為に心を虚にし気を平かに」（２下）することで想像の政治

的共同体を作り上げると言えよう。

それは、人情世態小説『一読三嘆当世書生気質』（晚青堂一八八五・六―八六・一）・『新磨妹と背かゞみ』（会心書屋一八八六・一―九）の場合も例外ではない。〈日本〉の文化・社会・国民性の特徴を述べた部分を掲げる。

(1) 日本は全体便宜な国さ。名譽も大業に得られぬ代りに。辱を大げさにはかかない国だよ（『書』17）

(2) 邪魔になりやア離縁をするさ。日本じやア離縁は平常だ（『妹』4）

(1)は、田の次と小町田の恋を擁護しようとした倉瀬の発言だが、一度の失敗で人生が決定づけられない国として〈日本〉を提示する。(2)は、田沼が水沢にお辻との結婚を勧める際の言葉だが、〈日本〉は離婚が日常的慣習である国として示される。(1)・(2)は、特徴を語る言説が〈日本〉を受け手に想像させる。

次に、『書生気質』・『妹と背かゞみ』・『小説外務大臣』（『読売新聞』一八八八・四・五―六・二九）から、西洋とは異質な場とし

西田谷 洋

て「日本」を提示する記述を見てみる。

(3) 僕があんまりアイデアルだもんだから。時々妙な妄想を興して。西洋思想を日本の社会へ。tailoringに應用するからそれで失策することがあるんさ。しかし此弊は僕ばかりじゃない。日本全体がさうだ(『書』11)

(4) 日本じゃア中々英国の真似は出来ない。また真似をしたら大変な騒だ(『妹』4)

(5) 日本では見ない事でございますからああいふやうな事は如何にしても目にたちませうから(「外」17)

(3)は、田の次との結婚を勧める倉瀬への小町田の反論だが、西洋思想の機械的・直接的な日本への導入が混乱をもたらすとする。(4)は、(2)の田沼に反論した水沢の言葉だが、日本と英国の異質性を強調する。(5)は、山の井夫人の男女間の握手・キス肯定論にみな子が異議を唱えたもので、男女の握手は現今の日本の風習にそぐわないとする。(3)・(5)は、他国・地域と異なる独自の文化・制度の場としての「日本」を作り上げる。

この「日本」の異質性は、原理的には、他者・他国との共約可能な立場からの比較を行った上で、初めて成立する。「日本」の独自の特徴は、世界との関連を無視するのではなく、それを視野に入れることで構想される。西川長夫氏も、国民国家は他の国民国家との関連において存在すると説く。国民国家形成を文明化と共に遂行するとき、個別的な挫折の経験は、西洋／日本という対立図式で再現され、「日本」の国民共同体への帰属の欲望を満たす物語が語られる場合がある。小町田や水沢の語る「日本」とは、そうした物語だ。

ともあれ、近代国家を、「日本」を、逍遙小説が、いかに(再)生産し反復していったかは、十分な検証を必要とする。そこで、本稿では、第一に、他者・他国との関わりから自己・国家・国民意識が生成することを『内地雜居未来の夢』(晩青堂二八八六・四一〇〇)等で、第二に、家族と人情が近代国民国家の基礎となることを『妹と背かぐみ』・「細君」(『国民之友』一八八九・一)等で、各々、検証する。本稿は、逍遙の作家論でも作品論でもない。本稿は、ある言説空間が国民国家「日本」概念を生産する過程において、人々を無自覚に規制する象徴権力の動態を見ることを目的とする。

二 『未来の夢』のオリエンタリズム

近代国民国家を主導するのは、アンダーソンが指摘するように、均質社会への志向だ。酒井直樹氏は、この均質志向社会性が、「習慣の共有、言語伝達の円滑化、言語の普遍化など、社会構成員間の相互交換性と間主観的な共約性の増加を肯定的な指標として、社会性を定義すると同時に、社会性を伝達論のモデル」で捉えると指摘する。逍遙の場合も、『小説神髓』(松月堂一八八五・九八六・四)の主張(6)は、文化・政治・言語を均質化して「日本」を覆い尽くすことを目指している。

(6) 永遠に企図する所のは宇宙の万国を一統して一大共和国の有様となしおよぶだけ風俗をもまた政体をも国語をも同一ならしめんと望むにあり(『神』下「文体論」)

一方、コミュニケーション面で、国民国家形成の障害となるのは、共同体外部から入り込む移民だ。移民は、習慣を共有せず、言語伝

達に障害を生み、知識を個別化し、社会を異質な構成員から成る葛藤的な場にしてしまう。均質な国民文化を志向するならば、移民・外国人は排除されるはずだ。⁵⁾『未来の夢』が描く内地雑居問題の根幹は、ここにある。

内地雑居論争は、幕末に結ばれた不平等条約の改正前夜、改正後の外国人の国内混在や土地所有の是非をめぐる起った。論争における賛成・反対は、必ずしも進歩派・守旧派という二項対立に重ねられない。⁶⁾内地雑居は、均質な場の中に外国人をいかに組み込むかという国民統合に関わる問題であると同時に、市場開放と国内保護という他の国民国家と対峙する国民国家形成の問題としても、浮上した。

まず、賛成論を見ていく。馬場辰猪『条約改正論』（興文館一八九〇・一、英文版一八七六・一〇）は、日本と「同一平等ノ權利ヲ有スル」にも関わらず「不正不当ノ条約」を維持しようとする欧米諸国を批判する。小野梓『条約改正論』（富山房一八八七・三）は、「西洋人ヲ内地ニ延接シテ内地人民ノ懶夢ヲ警破シ、西洋ノ文明ヲ採テ西洋人ト交際狂騒スルノ覚悟ヲナサシムルニ若カザルナリ」（五）と説いた。また、内地雑居反対論者は渡来人の子孫であり、雑多人々が集まって国家を構成すると雑居反対を退ける田口卯吉『条約改正論』（経済雑誌社一八八九・一〇）は、多民族国家（日本）を含意する。島田三郎『条約改正論』（郁文堂一八八九・一二）は、日本に投資を誘発するほどの価値はなく、優勝劣敗の法則と民族興亡とは無関係と指摘する。内地雑居肯定論は、〈日本〉は欧米と対抗可能であり、〈日本人〉は海外進出可能な優等人種だということ

とを寓する言説だ。

次に、反対論を見てみよう。松永道一『内地雑居経済未来記』（秀英舎一八八七・五）は、「内地の人民は兎ても角ても農業上にも工業上にも將た商業上にも決して西人との競争に勝てないとする。

〈日本人〉を劣等人種として捉える点は、井上哲次郎も同様だ。井上は、国家の強固さは「人民同一の言語風俗体等を有」（『内地雑居論』哲学書院一八八九・九）する点にあるとし、内地雑居は「日本古来の風俗、習慣、政治、文学、宗教、其の他百般の時々物々をして一時に変動」（『内地雑居統論』哲学書院一八九一・五）させてしまおうと非難する。国民国家共同体の均質性の強化は、結局は、欧米に対抗可能な段階にまで強国化をめざすということを含意し、反対論は、それまでの暫定的保留なのだと言えよう。劣等人種論は、欧米に対抗不能という現状分析のみを提示する。内地雑居論争は、〈日本〉が欧米に対抗し海外進出するための方略と過程をめぐる対立でもある。

『未来の夢』での稻積玄治の農業立国論(7)と、渥美恭輔の商業立国論(8)を見てみよう。

(7) 農産を増し米穀を輸出し、兼ては内国の富源を固くし、非常に備ふるに如ことあらじ（略）我國はもと微力の国なり。

よしや外国に資本を募りて、擬其局に当ればとて、争でか英国に敵し得べき（『末』7）

(8) 御国の地勢は、四方海をめぐらして、西の方支那、朝鮮に近し。之を大ブリタニヤの本島に比ぶるに、髣髴相似て優る者あり。大に商業を振興して、我日本国を護らんとせば、或

は万国と競ひ得べし(『未』7)

(7)は英国への劣等意識が示され、(8)は「日本」の上昇可能性が掲げられている。上昇志向と劣等意識の両面的な対象としての「西洋」との関係の中に「日本」の同一性は、ある。二つの立場は、いずれも「日本」を同定する。「未来の夢」冒頭で二人に提示された国家モデルの違いは、内地雜居論争の二つの立場に対応していたと言えよう。

しかも、これらの国家モデル実現の成否とは別に、『未来の夢』における「日本」は、既に商業の面で世界システムに組込まれている。世界システムは、国際的な経済秩序と国際的な分業を特徴とし、中心が周縁を収奪する機能を持つ。(7)・(8)は、イギリスを中心とし「日本」を周縁／半周縁とする、世界システムの存在を示す。特に(8)は、世界システムの中心への「日本」の参入を目指している。つまり、世界システムの根幹は、「郵便万国より届」(『未』8)き、「新聞紙」(『未』8)の外報等の通信網、「蒸気船」(『未』12)による交通網を駆使した貿易にある。第二回での渥美の日本酒改良論や、第八回での中国商人が関与した米取引で没落した稻積家の命運が示すように、「日本」経済は、一国内の自閉的システムではなく、世界的な流通貿易のシステムに接合している。ナショナリズムは、渥美の父への諷言(9)のように、世界システムでの競争で強化される。

(9) 今の競争者は外国人なり。競うて打負なば御国の損耗
『未』2)

外国人が類型的悪玉として造型される『未来の夢』の排他的ナショナリズム、「外敵圧倒の精神」(2)も、世界システムへの「日

本」の連結の結果の産物と言えよう。

さらに、『未来の夢』には、「チャンチャン」(『未』5)、「人豚」(『未』7)、「校槍」(『未』8)、「貪欲」(『未』8)等の、中国人への否定的表現が頻出する。政党首脳の会話にも、「卑怯で不可テ。兎角陰險な手を用ひてな。まるで支那人の商法のやうでな」とか、中国人は「内、徳義を残ひ、外、経済を害」(『未』10)する等の言葉が散見する。また、現行テキストの結末でも、日本人と中国人の人力車夫同士の客の奪い合いから双方が衝突し、暴動が起きる場面(10)がある。

(10) たちまち日本人の勞力者共が、いつしか百余人党をなして、鳶口竹槍など打振々々、ドッと横合より鯨波をつくりて、支那の暴徒等に撃つてかかれば(『未』14)

いずれも同じ暴動参加者のはずだが、(10)では、日本人が「勞力者共」なのに対して、中国人だけが「暴徒」と表記される。会話文・地の文双方を通じて、『未来の夢』では、中国人は、否定的に形象化・差別化される。『未来の夢』の中国人は、日本人に経済的・道徳的に有害な集団として語られている。これは、直接的には、甲申事変から天津条約に至る反中意識の反映とされるが、国民国家形成の面から捉えることも可能だろう。

エドワード・サイードは、オリエンタリズムとは、「現実についての政治的ヴィジョンであり、身内と他人との間の差異を拡張する構造」だとする。また、酒井氏は、敵と味方の二分法は、国民共同体に同一化するか否かという単純化された二項対立に、個人が用いる国民共同体への多様な関係を還元し単純化すると指摘し、「差

別する側の自らの民族的同一性や国民的同一性を表象するために」差別が行われると述べている。

『未来の夢』の中国人蔑視は、このような他者の排除による国民国家の形成の過程を端的に示していると言えよう。『未来の夢』は、内地雑居により領土内に居住する中国・欧米諸国出身者を「日本人」とは異質な存在として差別化して、国民国家「日本」の均質性を高めようとしている。

(11) 近頃新聞紙の報道によると、たしかに日本人の無頼漢なんぞを潜伏させてある……隠匿してある外国人が、東京府内にもあるといふから、或は其種類の者ぢやアないか……それも原因は何かといふと、兎角外国人の邸宅へは、「戸口の調査」なども届かんからです（『末』9）

(12) 日本を印度などと同視したる言分。事情に昏いのは笑ふに堪へた事だ（『末』12）

(11)は、金時計を奪った中国人拘摸の逃げ込んだ家に踏み込んで、主人の英国人に殴られ不法侵入で警察に突き出された菱野詞狂に、友人の田所鼎が英国人と拘摸が共犯ではないかと指摘した後の言葉だ。(12)は、インド航路で帰国途中の渥美が、蒙昧な民を教化するため日本に向かう英国人女性ホウトンとの会話を思い出す場面だ。(11)では、外国人が「戸口の調査」即ち国勢調査の対象外であることに注意したい。アンダーソンは、国勢調査が領域内部に属する人間を全て抽象的に数量化・分類化して把握することで、空間的に限定された人々の絆を作り上げ、国民国家共同体を想像すると指摘している⁽¹³⁾。国勢調査の対象から外されることで、外国人は、「日本人」でな

い者とされるだけでなく、治安統制の網から外れて非合法的な悪を行う存在と見なされてしまっている。(12)では、同じ東洋でありながら、近代化を進める日本と植民地インドを同列に置くことを否定している。先の中国を劣位に置く把握も合わせるならば、西洋の知を受容することで、「日本」は東洋の中で上位の場を占めると考えられていたと言えよう⁽¹⁴⁾。

これまでの逍遙小説の戦術を要約しよう。逍遙小説は、西欧を中心・普遍的・進歩的なものとして捉え、それと対照的に特殊かつ遅れた場として「日本」を想像する。しかし、西洋の知を獲得しつつある「日本」は、周縁的な他のインド・中国等の東洋諸国に対して、半周縁としての独自の位置を占める。西洋に対して劣位の「日本」、されど他の東洋には優位の「日本」という国民国家観は、オリエンタリズムをそれぞれの関係に適用することで生まれたと言えよう。それは、個別・特殊な歴史的文脈に規定された、世界の諸地域が発する様々な言説を、語り手・作中人物が統御し、自己の叙述に都合のいい部分だけを時間的・空間的に脱色して抽出して使用することで、可能となっている。

三 『妹と背かゞみ』における家庭と人情

前節までは、逍遙小説が、国外の他者に対して、二重化されたオリエンタリズムを駆使することで、均質的な国民国家共同体としての「日本」概念を生産したことを見てきた。そこで、本節では、内部から国民国家を作り上げるモジュールとしての人情と家族に注目する。結論を先取りしておこう。第一に、国家は「人民相互二人情

ナル者ヲ以テ交通¹³⁾」して形成され、人情は、それを描くテクストの出版・流通・享受によって、同じ〈日本人〉ならば分かり合えるはずだという感性の共同体を形成する機能がある。第二に、家族は、世帯を構成する経済的単位であり、「国家による統治―管理の重要な単位であり、そのような多様な機能を一身に集めたものとして国民国家の基礎単位であ」り、国家のイデオロギー装置としての機能を担う。

近代国民国家成立期には、均質的で国家の直接の構成員となりうる個人を作り上げねばならない。牟田和恵氏によれば、〈国民〉を作り上げるために、階層的な多様性や身分制度に基づいた人々の間の非等質性、各々の「家」の論理に基づいて存在する個別性を否定し、家庭が問題化された¹⁴⁾。そして、家庭を描く小説は、「悲劇・ハッピーエンドにかかわらず、男女・夫婦の愛情、舅・姑と嫁の確執など家庭内の人間関係が織りなす世界がそれだけで主題となつて」いる¹⁵⁾。

そのような家庭を物語内容の素材とするのが、『妹と背かどみ』や「細君」だ。両者は、いずれも家庭の崩壊、夫婦の危機を描いている。『妹と背かどみ』は、土族の水沢と魚屋の娘お辻とが、一度は真心によって結びつきながらも、覗き・立聞きが作り出す誤解で真意が理解されないことにより、離縁に至る物語だ。「細君」も、洋行帰りの官員下河辺とその夫人の関係の瓦解を夫人と奉公人お園の視座から描く物語だ。離婚に至る夫婦の苦悩に満ちた心理の揺れ動きは、お互いや周囲には悟られることはない。『妹と背かどみ』や「細君」での人情表現は、他者には隠された内面の存在を示している。

る。

(13) 打笑みながら。窃に肚の裏に快からず（『妹』14）

(14) 女心の辛さをも察せず、わざと腹立ちし風情を見せて、荒々しく畳を蹴立て、立帰る姿の恨めしさ。又それを見ても斯う斯うと言ふに言はれぬ心の切なさ。夫人はあとに泣き伏したり（細）3）

(13) は、恩人木村に遊郭通いの噂を諷められたときの水沢の外面と内面の違いを端的に示した地の文だ。また、(14) は、夫人が実家の継母に本心から離婚したいと告白したにも拘わらず、継母には金を貸さない言い訳であり嫌がらせだと受け取られた後の場面だ。(13)・(14) のような、家族をめぐる苦しみや悩みが、『妹と背かどみ』や「細君」には満ちている。さらに、『妹と背かどみ』では、お辻は、水沢の浮気を疑い、お春の行き過ぎによって免職となった水沢に離縁を宣告されて、途方にくれ、自殺する。「細君」では、夫人は夫の浮気に悩み、実家に用立てするための金策に苦勞し、それを夫に叱責され嘆く。

逍遙の小説には、『未来の夢』を除いては、ほとんど〈日本人〉のみが登場する。逍遙小説における苦悩は、その限りで、〈日本人〉の家族ならば、誰もが持ちうるものとして描かれている。物語における苦悩は、個々の差異を均質化する。誰もが悩み苦しみ、誰もが表には出しがたい内面を抱えている。その点で、亀井秀雄氏が正しく指摘する通り、「均質化された人間像を近代の小説（的言説）が作り出」す¹⁶⁾。

家族と人情とは、相互に関わり合って成熟していくとも言えよう。

国民国家の基礎単位的な家族の形成と、国民国家の主体を自律化する人情の内面化は、『妹と背かぐみ』から「細君」に至る逍遙小説が浮かび上がらせた問題であった。それらは、テクストの流布によって読み手に享受され、読者共同体に共有されることになるだろう。家族と苦悩という主題が、「日本人」・「日本語」という回路を通して、反復されることで、国民国家「日本」に満ちていく。近代小説の多くが日常的な内面を主題としたのは、その戦術の反復・強化だ。国民国家「日本」は、そのような方略を含む多くの戦術の束によって、体制の安定性・固定性を獲得していったと言える。

四 逍遙小説の「日本」

逍遙小説の「日本」観生成のプロセスを簡単に要約しよう。第二節で見たオリエンタリズムの二重適用による「日本」観は、世界との任意の比較の結果、第一節で取り上げたような「日本」の「独自性」や「伝統」を発見する。論理的には、そのような「伝統」や「独自性」は、現在から導き出された分析を過去に投影することで見出される。第三節は、他者を排除した「日本人」だけの家族や人情の問題化の反復が「日本」の自明性を強化するという「日本」生成の循環的構造を示唆した。いわば、逍遙小説の「日本」とは、国家に属する構成員を一元的な歴史と共同体に包含することで均質な国民国家を描き出し、単一民族的な国家イメージを作り上げるものだ。

周知の如く、日本は、その後、朝鮮・台湾等のアジア支配を遂行していく。この場合、支配者／被支配者は、欧米の植民地支配の場

合と異なり黄色人種同土だ。そのため、支配する側には「日韓ノ人種言語同一」（星野恒「本邦ノ人種言語ニ付鄙考ヲ述テ世ノ真心愛国者ニ質ス」）等の、支配される側との同質性を主張する論調が見られた。また、原住民の反発等により、二十世紀初頭には欧米宗主国が同化政策を放棄していたにも拘わらず、日本は統合・同化政策を進めていた。それを支えたのが、混合民族説だ。欧米人によって展開された近代的日本民族起源論は、一八八〇年代までに、日本民族は、アイヌ系・大陸系・南方系などの混合民族だとすることが定説になっていた。当初、混合民族説を支持した民権派や実証的歴史学者は、少数民族をも日本国民として包含しうる開放の論理として利用しようとした。だが、混合民族説は、大日本帝国の侵略によって支配された土地の住民をも日本国民として包含できる論理へと変化した。一方、一九三〇年代に入り、単一民族説が発生し、戦後の「日本」論における大和民族観の主流となっていく。²²⁾

こうして見るとき、単一民族説を物語効果として生産する逍遙小説の「日本」は、同時代日本の言説状況の主流ではない。単一民族・単一国民・単一国家を語る言説は、任意に理想化された西洋近代の国民国家・国民文化のイメージを日本に転写することで、伝統ある国民国家という保守的イメージを仮構する、西洋的・近代的な語りの反復だと言える。

この特徴は、明治以降、量産され続けた日本文化を語る言説にも見出せよう。日本文化論の多くに共通する特徴は、西川氏によれば、²³⁾任意の小さな部分を全体に拡大し、歴史的变化を無視し、比較・相対化を欠如させることだ。このような手続きに基づく限り、日

本文文化論は、日本特殊論でも、日本普遍論でも、自由に結論づけられる。逍遙小説の〈日本〉論は、そのような日本文化を(再)生産すると同時に、日本文化論の形成過程とイデオロギーの機構の一例を示していると言えよう。

- (1) 小森陽一「近代読者論」(『岩波講座現代社会学8』岩波書店一九九六・九)は、日露戦後の新聞小説は、国民の大多数に読まれうるリテラシーと、言語商品としての生産・流通・消費のシステムとを形成することで、文学享受を習慣づけ、国民としての同一性を慣習実践的に確認する中で、近代国民国家共同体を想像的に構築したと指摘する。この前提が、「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体」として近代国民国家を捉えたベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』(リプロポート一九八七・一二)だ。アンダーソンには、想像のあり方の多様性を考慮していないという佐藤成基「ネーション・ナショナリズム・エスニシティ」(『思想』一九九五・八)の批判があるが、想像の場としてのネーションという大枠は動かない。
- (2) 「日本型国民国家の形成」(『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社一九九五・三)五〇八頁参照。
- (3) 酒井直樹「序論」(『ナショナリティの脱構築』柏書房一九九六・二)二二頁参照。
- (4) 『死産される日本語・日本人』(新曜社一九九六・五)七六頁。

- (5) 『死産される日本語・日本人』七六頁参照。
- (6) 小熊英二「単一民族神話の起源」(新曜社一九九五・七)三三〇四八頁参照。
- (7) 『死産される日本語・日本人』六頁参照。
- (8) 山田博光「シンポジウム「文学的近代」の出版」(『日本近代文学』一九七八・一〇)二四頁参照。
- (9) 柳田泉「春の屋主人とその政治小説」(『政治小説研究・中』春秋社一九六八・九)五二頁参照。
- (10) 『オリエンタリズム・上』(平凡社ライブラリー一九九三・六)一〇七頁。
- (11) 『死産される日本語・日本人』八七頁参照。
- (12) 『ナショナリティの脱構築』四四頁。
- (13) 『想像の共同体』(『立命館国際研究』一九九四・一〇)一一二七頁参照。
- (14) 同時代の蔑視と警戒感の入り交じった中国観は、『日本近代思想大系12』(岩波書店一九八八・一二)を参照。
- (15) 末広政憲「政治小説治外法憲情話編序」(『政治小説治外法憲情話編』木谷博書堂一八八八・三)。末広政憲は、『治外法憲』を「国家組織ノ大本基タル人民ニ付属スル人情ニ付帯ノ交情ヲ解説」した物語として提示する。
- (16) 『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』一八頁。
- (17) 『戦略としての家族』(新曜社一九九六・七)一八一頁参照。
- (18) 『戦略としての家族』一七八頁。

(19)

前田愛は、『妹と背かぐみ』の主題を、「不幸な結婚をネガティブな鏡として、たんなる肉体的結合をこえた、相互の人格的理解にもとづく夫婦のありようを説くところ」（『近代日本』の文学空間）新耀社一九八三・六、三〇六頁）に見た。

(20)

『妹と背かぐみ』第十二回でお辻が無教養な下層出身ゆえ官員の妻に似合わない行動を取ると言うお菊の言葉は、「細君」第一回でのお三の教養ある夫人への批判とほぼ同じだ。この点で、階層格差と妻批判・家庭危機とは本来無関係であることに注意したい。

(21)

「小説のイデオロギー」（『北海道大学文学部紀要』一九九四・三）一八〇頁。なお、本稿では、人情を苦悩としてのみ問題化しており、『小説神髓』の劣情としての人情とは異なるが、いずれも外面と異なる内面を持つ二面化された人間像を要請する点では同一と言えよう。

(22)

小熊前掲書、同「国民」化という支配」（『歴史学研究』一九九六・一〇増刊）参照。

(23)

西川長夫『地球時代の民族—文化理論』（新耀社一九九五・一〇）一六七、一九三頁参照。

(24)

杉本良夫「日本文化という神話」（『岩波講座現代社会学』23）岩波書店一九九六・八）は、日本文化論の書き手・編集者・読み手の大半は大卒・大企業・男性集団という日本社会の特殊な部分に所属しており、日本文化論は特殊な階層のイデオロギーだと指摘している。